トキから学ぶ絶滅とヒト

人間とトキの過去と今

現在、世界の至るところに絶滅危惧種は存在する。またそのさらに上を行く「近絶滅種」や絶滅危惧種よりも危険度が浅い「危急種」もたくさんいる。そのような動物たちは「レッドリスト」と呼ばれるものに掲載される。二〇一四年十一月時点、その数は一万を超えている（WWFジャパンホームページより引用）。もっというならば、毎日何種と言われる数の動物が絶滅に追い込まれている状況なのだ。

日本にもかつて多くの動物が生息していた。今は見る影の無い動物がたくさんいたのだ。そのような動物の中の一つが「トキ」だ。トキはかつて日本中で見られたが、今は見ることができない。それがなぜなのか、また私たちはどうするべきなのか。それを聞くために、本校の102H、106H、110Hの計一二一人の生徒に対し、アンケートにていくつか質問を行った。

「知っている」大多数

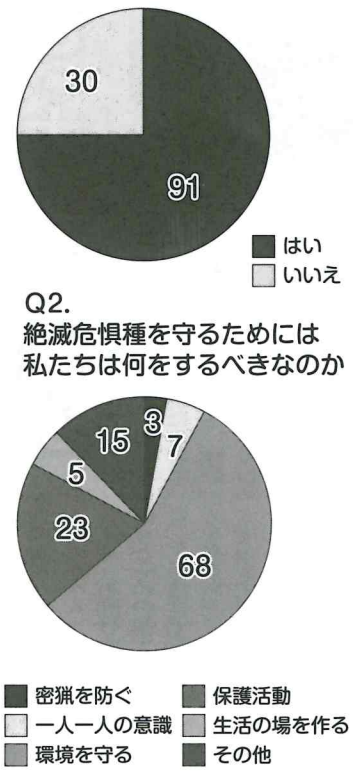
まず「トキを知っているか」という問いに対して、「トキを知っている」と答えた人は全体の四分の三であった。

その知っている人たちに対して、トキについて知っていることを聞いたところ、一番多かった回答は「白い」「鳥」など、トキの外見に関するものであった。次いで多い回答は「新潟」「いしかわ動物園」「絶滅」「保護活動」のように絶滅・保護に関するワードだった。このことからトキが絶滅したということは広く知られているということがわかった。

次に、「絶滅危惧種を守るためには私たちは何をするべきなのか」を聞いた。「地球環境を改善していくことによって絶滅危惧種を絶滅から守る」「保護活動をしたり、その動物たちにとって住みやすい環境に作り出したりすればよい」といった意見が多くの人の回答に見られた。少数ではあるが「密猟から守る」「一人ひとりの意識を変えることが大切」という意見も見られた。

最後に「日に日に絶滅動物が多くなってきている現状についてどう思うか」という質問をした。この質問の回答は多種多様であった。その中でも多かったのは「かわいそうだ、駄目な事だ」という意見だ。さらには「改善すべき」という意見もあった。だが、何人かこんな回答をしてきた人がいた。「人間が保護をするべきではない、そのような行動こそが人間のおごりだ」という意見。この意見は確かに納得できる。今さら絶滅させておいて、というような疑問を抱かざるを得ない。

では私たちは今、急に増えていく絶滅動物に対してどのような態度で接すればよいのか。このことを「トキ」を通じて学ぼう。



共存のために考え抜く

現在、私達の身の回りに野生のトキはいない。そのような状況を以前のようなものに戻そうとしている活動がある。「いしかわ動物園」もその活動に協力する組織の一つだ。今回、私達はいしかわ動物園・動物学習センターの竹田さんにお話を伺った。

―日本のトキは何故絶滅してしまったのですか。

理由の一つは、江戸時代まであった多くの規律がなくなり、誰もが無制限に生き物を狩るようになったことです。当時、トキによって起きる害は農家にとってスズメやカラスと並ぶほどの害でした。そのような点から猟の激しさは増し、また、一般の人々からも、色が綺麗な鳥とされ、猟の対象にされていました。さらに、近代から現代にかけて、環境が大きく変化したことも理由として挙げられます。湿田から乾田になったことやもともと「不器用な鳥」であるトキが環境の変化自体に適応できなかったことがその理由にあたります。

以上のように、日本のトキが絶滅した要因が数多くあったと思います。

―私達がトキを守るためにできることはありますか。

トキを絶滅させてしまったのは、他でもない私達日本人です。そのため、私達はもっと活発にトキとの共生のための活動をしなくてはなりません。

今、いしかわ動物園で行っているトキの分散飼育は、トキの飼育下個体群の維持に協力するためのものです。この活動は、万一佐渡で鳥インフルエンザなどの伝染病が発生した時に、全滅の危険を分散させるためのものです。いしかわ動物園の他には、島根県出雲市、新潟県長岡市、東京都の多摩動物公園の四カ所で分散飼育がおこなわれています。

この分散飼育地で生まれたひなたちは、最終的に全て佐渡のトキ保護センターに集められ、そこで野生化訓練を受けた後、佐渡の山野に放されます。二〇〇九年の秋から始まった野外放鳥では、今年の秋までで十三回を数え、二〇〇羽以上のトキが野外に放されています。

現在、佐渡で生息するトキは、野生で生まれた二世を含めて一六〇羽ほど。当初の予想を超えて順調に数を増やしています。これらは国のトキ保護事業にのっとって実施されており、石川県をはじめ、各分散飼育地はこの事業に協力しているわけです。

いしかわ動物園出身のトキもたくさん放されていて、早く野生で二世が誕生しないか、楽しみに待っているところです。

トキのような希少動物を、保護し増やしていくのは国など、行政の仕事です。しかし増えた生き物を受け入れて共生・共存していくのは、私たち国民です。その一例を紹介しましょう。

トキの主食は田で採るものばかりです。親鳥はこれから育っていくひなのために田に入って獲物を採ります。その際、トキの入った田は、トキが歩き回ることによって踏み荒らされてしまうのです。トキが日本から姿を消すまでは、農家の人たちは「田が踏み荒らされてしまい、苗を植え代えたり、収穫が減ったり、大損害だ」と嘆き、被害を減らすためにトキを追払い、時には駆除もしました。しかし、トキとの共生を願う佐渡の農家の人たちは、真剣に考え抜き、踏み荒らされてしまった田で取れた米を、「トキふんじゃった米」として売り出しました。トキが、絶滅するまでは、トキを害鳥として扱っていたのが、逆にトキに踏まれた米というのをセールスポイントとして売り出すようになったのです。ですが、この米の販路はまだ首都圏・関東方面でしか見出されてないのが現状であり、今後の課題です。この取り組みが日本全国に広まれば、トキの認知度が上がり、日本人の「共存しよう」という意識も高まると考えられます。またこの米は値段が少々高めであり、消費者が手を出しづらいのも現実です。しかし、この米は佐渡の中でもトキが生息する、無農薬、減農薬の水田で生産されており、品質は安心安全なものであるため、普通より高いお金を出しても消費購入するだけの価値が付いたのです。

ここまで紹介してきたのは現在、佐渡で行われている共生・共存活動です。

共生・共存は、いざ実行する時には実に難しい問題を含んでいます。佐渡の農家の人たちのように、共存のために考えて考え抜く、そのような意識を私たち皆が持つことが大事なことだと思います。

まず意識を持つことから始めましょう。

―二水生にメッセージをお願いします。

トキにまず興味を持ってください。興味を持った上で自分で色々と調べてみてください。自分で調べるということによって、自分の中に様々な知識を蓄積することができます。その上で「今から自分たちにできることとは何か」ということを考えてみてください。

このことは、トキや生物の世界だけに限られたことではありません。人間の社会における色々なことにおいてこのようなことがいえます。どんなことであったとしても、まずは興味を持ってください。自分で調べ、考えることによってその興味も深まると思います。

深まった興味を「力」として将来のために溜めていって下さい。いつかきっと役に立つ時が来るはずです。

―ありがとうございました。

これから巣立っていくトキ（いしかわ動物園提供）

「共存のために考えるのは大事」と竹田さん

考えを持つことから始めよう

近年では、一日に何種もの動物が地上から姿を消している。その要因には様々なものがあるが、人間に由来するものが数多くあると思われる。これからの時代、この問題をどのような方法で解決するのかについて一人一人が考えなければならない。それこそが今後人間が他の生き物たちと共存していくことの鍵となるだろう。

今回その解決の糸口を見出すために、かつて日本全国に生息していた「トキ」を通して人間と絶滅危惧種とのあるべき関係を多くの人たちに考えてもらいたいと考え、このような特集を企画した。

トキをはじめとする絶滅危惧種に関してアンケートを取った結果、多くの生徒は「保護するべきだ」という意見であったのに対し、少数だが「保護するべきではない」という意見の生徒もおり、「本当に絶滅危惧種の保護は必要なのか」という疑問が生まれた。

その疑問の答えは何か、トキの分散飼育に携わる『いしかわ動物園』の動物学習センターの方に伺ってみた。その答えは、「保護よりも共存のために考え抜くことが一番大切なことだ」というものだった。人間は絶滅の危機に瀕している動物に対して「保護」よりも「共存のための思考」を大切にするべきだということがよく分かった。

今生きている動物たちがいつ目の前から消えるかわからない。また、その状況がいつ「ヒト」に起こってもおかしくないだろう。それを食い止めるには人間と動物の共存について考えなくてはならない。皆さんも共存について考える習慣をもってみてほしい。（吉村）

日本のトキの生態は

「不器用な鳥」トキ

トキはペリカン目トキ科のなかの一属一種に分類される鳥である。トキの成鳥は全長が約七五センチメートル、翼長は約四〇センチメートル、体重は約二キログラムにまでなる。トキは四月が近づく頃には、二日に一個の割合で合計三～四個産卵する。その卵は長径約七〇ミリメートル、短径約四五ミリメートルという大きさ、重さは七五～八五グラム程である。卵の色は、青緑色をベースに褐色の斑点がついている。産卵後、約一カ月で卵は孵化する。孵化したヒナは、親に餌をもらって約一カ月半で巣立ちし、親と体重が大差ないほどに育つ。トキは湿田で、カエルやミミズ、ドジョウなどを食べて暮らしている。親鳥はヒナと自分の食べるものを確保することが必要となる。しかし、乾田化した水田や一般の池沼では、トキは餌をとるのが非常に遅く、不器用な鳥なので、「サギ」に餌をとられてしまうことがあるのだ。湿田などで餌を採ることに特化したトキにとって、水田環境の変化は、絶滅をもたらした一つの要因といえる。

動物学習センターにあるトキの剥製

世界のトキ

今まで紹介してきたのは、日本や中国で見られるトキであるが、世界にはいろいろなトキがいる。その一つとして、オーストラリアにはクロトキというトキが生息している。クロトキは、ゴミをあさり食べて暮らしている。日本で言うところのカラスのような生活をしている鳥なのだ。このように、同じトキであったとしても、場所によって全く生活の様子が違うのである。そして、クロトキと比べて日本や中国のトキは、環境の変化に柔軟に適応することができず生活力が弱い鳥であるのだ。